ランブイエ邸の平面図の復元

17世紀パリの邸宅の空間構成の変化に関する考察

RESTORED PLAN OF HÔTEL DE RAMBOUILLET

A study on the changes on spacial formation of hôtel in Paris in 17th century

片山 勢津子*

Setsuko KATAYAMA

This study is to show the spacial characteristics by restoring the plan of Hôtel de Rambouillet in Paris, and to consider the elements which caused the development of hôtel design.

The restoration is made according to the imprints of the Rambouillet's plan which remain in the two study plans of Louis Le Vau, new materials. And I make the forms of the site and buildings clear. As a result, Hôtel de Rambouillet proves to have been planned in view of how visitors move and look. Not a few of Rambouillet's devices are found in the later hôtels.

Keywords: Hôtel de Rambouillet, salon, restoration, hôtel, 17th Century, Paris

ランブイエ邸, サロン, 復元, 私邸, 17世紀, パリ

1 はじめに

ランブイエ邸 (Hôtel de Rambouillet) とは、ランブイエ侯爵夫人 (Marquise de Rambouillet, 1588-1665) が客人を自邸に招くための所謂サロン¹⁾を開設するために、相続した建物を自らの計画によって増改築したパリの自邸である。工事中から衆目を集め、リュクサンブール宮殿建設中の皇太后マリー・ド・メディシス (Marie de Médicis, 1573-1642) が、建築家 (Salomon de Brosse, 1571-1626) に見に行くように命じたという逸話²⁾も残る。この館を舞台に、文学や言語、マナー、室内装飾が発達したことは広く知られる³⁾。

ランブイエ邸の工事が始まった 17 世紀初期のパリは、宗教戦争 (1562-98) で荒廃した市街地の復興時期であった⁴⁾が、アンリ 4 世 (在 1589-1610) が行った公共事業⁵⁾によって急速に発展し、マレ地区を始めとする市街地に多数の邸宅が建設されていた⁶⁾。そして、貴族の館では、ランブイエ邸が契機となってサロンの習慣が広まった。ランブイエ邸で最も有名な箇所は、サロンのための『青の部屋 (Chambre Bleu)』で、当初、珍しい青色で室内がコーディネートされた部屋⁷⁾である。資料から、家具・調度品は明らかになっており⁸⁾、建物についても画期的な点が幾つか指摘されている。しかし、図面が残存しないため、建物全体の構成が扱われることは稀で、参考程度に部分的に言及されているのが実状である。これまで

復元を試みたものとして、バブロン (Jean-Pierre Babelon) の図書⁹⁾掲載の復元図 (図 3) があるが、未完部分があり不明点が残るものである。また、ランブイエ邸について書かれた図書¹⁰⁾に、外観図 (図 4) なるものが掲載されているが、当時の記述とは矛盾する。これらの点については後述する。

本論は、新たな手掛かりとして、建築家ルヴォー (Louis Le Vau, 1612-1670) のルーブル宮殿拡張案の図面 2 点 (図 1, 図 2) に見つけたランブイエ邸の痕跡を元に、平面図の復元を試みるとともに、計画した夫人の意図を読み取り、その後の私邸建築の空間構成変化の要因を考察するものである。

復元に際して主に参考とするのは、ソーヴァルのパリ歴史書 (Henri Sauval: Histoire et Recherches des Antiquité de la Ville de Paris, 1724¹¹⁾) とサヴォの建築書 (Louis Savot: L'Architecture François des Bastimens Particuliere, 1624, 1635)¹²⁾ である。ソーヴァルの書は、パリの地理、建物、習慣などを網羅した大著で、私邸の詳細な著述がある。17 世紀中期に出版予定のまま著者が死去したため後年、第三者が出版した。サヴォの書は、貴族やブルジョアを対象とした私邸建築の手引書で、図面は掲載されていないが詳細な記述があり、建築アカデミー長 N.F.ブロンデル (Nicola-François Blondel, 1618-1686) の注釈で 1673 年に再版されている。

* 京都女子大学短期大学部生活造形学科 准教授・博士 (学術)

Assoc. Prof., Dept. of Life Design, Women's Junior College of Kyoto, Ph. D.

図1 ルーブル宮殿拡張案 (Louis Le Vau, 1660)
チュイルリー宮殿とルーブル宮殿の間にシュ
ヴルーズ邸とランブイエ邸が確認できる。

図2 ルーブル宮殿拡張案 (Louis Le Vau, 1664)

図3 バブロンによるランブイエ邸復元図

図4 ランブイエ邸外観図 (Emile Magne, 1929)

図5 南に隣接するシュヴルーズ邸外観

図6 1651年の地図にみるランブイエ邸周辺（上部が東）

2 ランブイエ夫人とランブイエ邸のサロン

夫人の旧姓は、カトリーヌ・ド・ヴィヴオンヌ=サヴェーリ (Catherine de Vivonne-Savelli)，ローマ生まれで、父はローマ駐在フランス大使ビザニ侯爵，母はローマ名門貴族のサヴェッリ家出身であった。幼少時から学問芸術を広く修め、特に語学が堪能であったと言われる。7歳で家族とともにフランスに移り住み、1600年にアミアンの司教代理シャルル・ダンジェンヌ (Charles d'Angennes, 1577-1652) と結婚した。夫は、1611年にランブイエ侯爵を襲名，ルイ13世の衣裳部屋係や旅団長を務め、後に外交官に転じた人物である。夫妻は2男5女に恵まれた。

夫人は、第1子ジュリーを身籠った19歳の時、病気を理由に宮廷を退出した。当時、宮廷の社交界を辞することは極めて稀だった¹³⁾ため、アンリ4世時代の粗野な宮廷に嫌気がさしたことが一因と、一般に考えられている。宮廷退出後は自邸のサロンで名を成した。

ランブイエ夫人のサロンはいわゆる文芸サロンで、貴族や文筆家が集まり、アカデミー¹⁴⁾会員が多かったことも特徴である¹⁵⁾。サロンはフロンドの乱 (1648-1653) まだが最盛期¹⁶⁾で、中断ののち夫人が亡くなる1665年まで継続する。その間、小規模な工事¹⁷⁾が度々行われた。

3 敷地の状況

場所はソーヴァルの書から特定できる¹⁸⁾。サン・トマ・デュ・ルーブル通り (Rue de St Thomas du Louvre) に面し、シュヴルーズ邸 (Hôtel de Chevreuse, 図5)¹⁹⁾に隣接、病院 (Hôpital des Quinze-Vingts)²⁰⁾の墓地と境界をなす。宮殿に近い特別地区だった²¹⁾。

当時の敷地の様子は、ゴンブーストの絵地図²²⁾ (Gomboust, 1651) で確認できる (図6)。通りは、パレ・ロワイヤル²³⁾からセーヌの川岸に至る道で、ルーブル宮殿とチュイルリー宮殿の間に位置する。

図7 ルーブル宮殿拡張案 拡大図 (Louis Le Vau, 1660)

図8 ルーブル宮殿拡張案 拡大図 (Louis Le Vau, 1664)

ロワイヤル橋とヌフ橋にも近く、貴族や商人で賑わった場所である²⁴⁾。敷地は道に東面し、建物は西北に位置する庭園を囲んで北側と南側の建物からなる。ソーヴァルの書から、北は平民の住宅であった部分、南は貴族の館だと推測できる²⁵⁾。

ところで、図4のランブイエ邸外観図とゴンブーストの地図 (図5) を見比べると、外観図が地図の構図を元に、庭園越しに北側の住棟部を想像して描いたものであることが想定できよう。図示されているのは、増改築した部分とは違う裏方部分なので²⁶⁾、ランブイエ邸と称するには問題があると言えよう。

ルヴォーの1660年の図面 (図1, 図7) から、シュヴルーズ邸とランブイエ邸の概要が確認できる。互いの境界は定かでないが、ゴンブーストの地図やバブロン図から感じる不整形な印象とは異なり、ランブイエ邸の敷地形状が矩形的の集まりであることが分かる。一方、1664年のルヴォーの図面 (図2, 図8) からは、ランブイエ邸の一部がルーブル宮殿拡張部の下敷きになっているため敷地全体の判別は困難だが、線が太くなっている部分が敷地境界を示してい

図9 ランブイエ邸推定ブロック図

と判断できる。また、主翼正面のパヴィリオンや側翼の開口部、階段の位置を確認できる。そこでまず、これらルヴォーの図面に倣って、関係資料²⁷⁾を参考に、敷地上に建物のブロック図を描いた(図9)。ただし、シュヴルーズ邸と接する南側、特に裏庭部分については境界を正確に判別できない。隣地がさらに食い込んでいる可能性もあるが、この部分はランブイエ邸の裏方部分なので、ここでは整形して描く。寸法詳細までは確認できないが、厨房棟の一辺の長さは約8mと指摘されている²⁸⁾。ところで、ランブイエ邸の敷地について「2つの通りに面していた」²⁹⁾という記述を散見するが、これは裏口や庭園から出入りできたことに起因する誤解だったと考える。

なお、1615年の絵地図³⁰⁾では通りは確認できるが、敷地位置は特定できない。また、夫人が没した1665年の絵地図³¹⁾では敷地位置に建物が描かれておらず、1710年の絵地図³²⁾には別名の新たな邸宅が描かれている。これらの状況から、名高いランブイエ邸ではあるが、その存在は夫人がサロンを開設していた50年足らずで終わり、その時期は丁度パリが整備され、貴族やブルジョアの邸宅が盛んに建設された時期にあたるのが分かる。

4 着工までの経緯

旧邸についてのソーヴァルの記述³³⁾をまとめると、由緒ある貴族³⁴⁾が1606年に手放したもので、13-14世紀建造のため当時の法則にかなっておらず対称形ではなかった。また、2つの建物からなり、主建物は翼部が道に面し、他方は庭園と中庭と裏庭に面する。夫人の父ビザニ侯爵の死後、1611年にランブイエ夫妻が相続する。

次に、前掲のパブロン³⁵⁾の書から、工事の経緯を紹介する。

1614年：病院墓地に面して4つの窓を作る権利を取得する

1615年：『チェイルリーへの水道管』³⁵⁾に配管できる特権を取得する

1618年：着工

1619年：建設中の暖炉を支えるために隣地の墓地の中に支柱1本を設置する許可を取得する

しかし、工事は何らかの問題を孕んでいたようで、司法の仲介で中断する。その後の工事は、ランブイエ夫人の計画案に基づいて進められ、ピオシュ(Marc Pioche)³⁶⁾が工事監理を担当した。

夫人自らが難題を解決する計画案の図面を引いたことは、ソーヴァルの記述³⁷⁾の他、詩人ヴォアチュール(Vincent Voiture, 1597-1648)の記述³⁸⁾、従兄弟タールマン(Gédéon Tallemant des Réaux, 1619-92)の逸話集(1657-9)³⁹⁾などから確認できる。工事の経緯から、立地条件が悪かったにも関わらず旧邸を残して改築することに固執して、夫人が新たな計画を発案した様子が窺える。

5 平面図復元の手順

ルヴォーの図面(1660, 図7)から、シュヴルーズ邸の敷地がランブイエ邸の敷地に食い込んだような形になっている部分に前庭に面した主翼があり、オフィス翼の主階段や主翼西の裏階段などを読み取ることができる。これらはパブロン図と異なることから、パブロンは、ルヴォーの図面に残る痕跡を知らずに復元図を作成したと思われる。そこで、ルヴォーの図面を元に、階段や開口部の位置を整理し、ランブイエ邸の平面図の作成を試みた(図10)。以下にその手順を示す。なお、括弧内の数字は図10における該当箇所を示す。

1) 庭園の噴水と植え込みを描く：ルヴォーの図面(1660, 図7)は、庭園の噴水と植え込みの位置を明瞭に示している。噴水中央である庭園中央の位置決めは、建物の庭園側外観の軸線を決める重要素で、外部階段と主翼の開口部の位置決めにも必要である。(1F-22)

2) 壁の位置を描く：間仕切り壁の位置については、前掲のサヴォの書⁴⁰⁾を拠り所として、慣例と思われる部屋の大きさと部屋の構成を考慮して決定した。例えば、寝室(chambre)は正方形で、寝室前室(antichambre)は寝室の大きさに揃え、寝室奥にはキャビネ(cabinet)と衣裳部屋(garderobe)を設けた。

3) テラスの位置を決める：ルヴォーの2図面に、門からみるとやや左側にずれた位置に、主翼のパヴィリオンらしき表示が見える。当時の主翼正面外観は左右対称が原則であるので、原則を崩さない手法でオフィス翼と対称の位置に何らかの建物があったと思われる。ソーヴァルの記述から、前庭から庭園が見えたことが確認できる⁴¹⁾ので、右手にテラスを配置していたと考えるのが妥当であろう。そこで、中心軸をパヴィリオンの中心と想定して、オフィス翼と対称になるようにテラスの位置を決めた。(1F-17)

4) テラスと厨房棟の間にランプを作る：パブロンによると別棟は、地階に厨房、1階に従者の広間、2階に執事室があった⁴²⁾。厨房棟横には、従者の中庭がある。ソーヴァルの記述から、前庭からこの中庭へ抜けられたことが確認できる⁴³⁾。主翼から厨房棟への連絡通路が必要であるので、上述のテラスは、連絡通路を覆う屋根に当たる部分と考えるのが妥当であろう。前庭からの中庭へ至る馬車のための通路も必要であることから、地下の連絡通路の位置を配慮して、テラスと厨房棟の間にランプを配置した(1F-18)。なお、テラスとランプは、パブロン図に明示できていない部分である。

5) 窓の位置を決める：ルヴォーの図面(1660, 図8)から、オフィス翼前庭側に開口部が5つあることを読み取り、開口部の位置を決

図 10 ランブイエ邸復元平面図

めた。次に、その対称位置に厨房棟とテラス塀の開口部 5 つの位置を決めた。主翼正面の開口部については、中央パヴィリオンに 1 つ、残りは左右対称になるよう整えた。さらに、庭園側外観は庭園軸線部に開口部が位置するように、全体を整えた。

6) オフィス翼にペロンを配置する：ペロン (péron) とは入口前の階段である。主階段の上る方向とペロンの位置は、2 階の大広間への動線を考え、さらに詩人ヴォアチュール (Vincent Voiture, 1597-1648) の記述⁴⁰⁾を考慮して、回廊にペロンがついたような形状で主階段の上り口前に描いた (1F-23)。ただし詳細は不明である。

7) 庭園側外部階段の位置を決める：庭園側外観を考慮して、庭園軸線上の開口部に外部階段の位置を決めた。これは、サロンの常連達が、裏口からランブイエ侯爵の آپルトマンに入り裏階段を通して夫人の آپルトマンに入ったという記録⁴⁰⁾に合致する。

8) 礼拝堂を配置する：ゴンブーストの地図とルヴォーの図面 (1664, 図 8) から、部屋の位置を確認して 1 階に配置した (1F-7)。手掛かりが不明瞭なので大きさは不明で、隣接するシュヴルーズ邸に食い込んでいた可能性もある。なお、ルヴォーの 1660 年の図面には表示されていない。

9) 夫人の礼拝室を配置する：基地に面した開口部の一つが、2 階にある夫人のキャビネ横の礼拝室であると考えて位置を決めた (2F-7)。キャビネ横の残りの部分は、寝室からアクセスできるので、衣裳部屋と考えるのが妥当だろう (2F-6)。

10) 改築・増築部分の位置を決める：2 階の夫人のアルコーブ付き寝室はバブロン図のように寝室からのアクセスがあったと思われるが、図面の痕跡からは確認できなかったため形は不明である。そこで、バブロン図に倣って記載した (2F-9)。このアルコーブは、夫人が寒さと暖炉の日照りから逃れるために使用したとされるものである。娘ジュリーのために 1627 年に作られた آپルトマンは、一般的な構成である寝室・キャビネ・衣裳部屋の 3 室を 1 階広間の庭園側に破線で記した (1F-24)。広間を改築して作ったと思われる食堂も破線で示した (1F-25)。さらに、サロンの座興として増築された 2 階の『ジルフエの間 (La Loge de Zirphée)』⁴⁰⁾を、夫人キャビネ西の開口部分に張り出して作った (2F-8)。この張り出し部は秘密裏に作られて、来客の前で突然出現したといわれる場所である。

11) 細部を決める：暖炉や入り口等の細部の決定に際しては、サヴォの書

を参考にした⁴⁰⁾。例えば、部屋ができるだけ左右対称になるように開口部の位置を整理し、戸口は軸線が通るように、また戸口を入った正面の壁の中央に暖炉を配置した。

12) その他：ランブイエ邸がフランスに導入したとされる浴室は、主翼 1 階裏庭付近に増改築されたと思われるが、位置を確認することはできなかった。また、フランスに珍しい生花を常に飾っていたことから温室等の施設が別棟である住棟付近にあったと思われる⁴⁰⁾が、場所を特定できなかった。なお、裏階段については、図面 (1660, 図 8) に倣って描いた (1F-8, 2F-10)。

6 建物の特徴

ランブイエ夫人による旧邸の増改築は、当時の人々の話題を呼び、様々な点で影響を与えた。そこで、平面図の復元によって明確になった点を踏まえて、特徴を以下に述べる。

1) 外観：旧邸を残しながら、当時の貴族の私邸建築の法則に適うように工夫したと思われる点が幾つかみられるが、その一つが前面道路と前庭からの外観である。まず、前面道路から対称に見えるように、門を中心に厨房棟と側翼を配置している。門から前庭に入ると、

側翼が片方しかないので中心軸がずれるが、それを解決するためにオフィス翼と対称の位置にテラスを設け、さらに中央にパビリオンを設けて不備を補っている。ソーヴァルの書によると、外観はイタリア風でレンガと隅石にスレート瓦を組み合わせたもので、「城館や宮殿の手法だったが、その後ブルジョア階層で流行する」⁴⁸⁾。中心軸のずれや規模の小ささを視覚的手法で補って、成功したことが窺える。

2) 前庭：前庭の幅が足りないが、テラス越しに庭園を見せることで不備を補っている。ソーヴァルは「入口や前庭のあらゆる場所から庭園が見える（中略）館に着くと驚きだけでなく明るさを与えてくれる」⁴⁹⁾と記述している。テラスの工夫によって狭さを感じさせず、さらに訪れる人に好奇心を与えていることが分かる。

3) 庭園：「多くの不思議が語られる名高い庭園」と呼ばれ、ソーヴァルの書にも記述がある⁵⁰⁾。サロンの常連客は裏庭から入ることができた。奥まった位置の囲われた庭園には、花が咲き誇って静かな別世界を形成し、夏はサロンの場としても使われた。中央の噴水は、ランブイエ夫人のキャビネから見えるチュイルリー宮殿のマドモワゼルの庭園にヒントを得た苦心の作で⁵¹⁾、詩人マレルブ (François Malherbe, 1555-1628) が「円形の泉水 (rond d'eau)」と詠っている。

4) 建物入口と主階段：当時、貴族の館の入口は主翼中央にあるのが常であったが、翼部に入口を配置し、広間の大きさを確保している。1620年代からこの配置が見られ、以後広まっていく⁵²⁾。前述のヴォアチュールのペロンの記述は、この配置の珍しさを示していると思われる。主階段は大きな踊り場のある半円形にカーブを描く階段で、トップライトからの光が差し込んだ。この配置についてはランブイエ邸が初めてという説が広まっているが、すでにアンリ2世の娘の館 (Hôtel d'Angoulême, 1584) に存在するので、この館に出入りしていた夫人が、そこからヒントを得て考案したと考える⁵³⁾。

5) 主翼動線：当時としては大変珍しい配置だが、入口から主階段、そして2階の大広間への動線には無理がない。階段室から広間へは90度曲がるが、さらに広間から夫人のアパルトマンへも90度曲がるため、視線に変化があり建物の狭さを感じさせない。ソーヴァルの記述では、アパルトマンの戸口が一行に連なるので「大変美しい眺望を形成している」⁵⁴⁾と、奥行きと格式を賞賛している。

6) 裏まわり連絡通路：主翼と厨房棟は別の建物で用途も全く異なるが、テラスとランプの下部を利用することで動線を確保している。

7) フレンチウィンドウ：一般に、フレンチウィンドウはランブイエ邸が広めたと言われる開口部である⁵⁵⁾。窓は窓台がなく上から下まであり、床から天井まで、視線を妨げられることなく庭園の眺望や楽しみを享受できる。一方、サヴォの書の窓の解説⁵⁶⁾から、この種の窓は、防犯性の点から都市部には用いない郊外の建物の開口部であったことが分かる。つまり、ランブイエ邸のフレンチウィンドウは、郊外で用いていた開口部にヒントを得たものと考えられる。

8) その他：ランブイエ邸が初めて導入したと言われるもののうち正確に確認できなかったものとして、ヴェスティビュール (Vestibule, 風除室) と食堂がある。ヴェスティビュールについては、入り口の位置が側翼部に配されて外気が直接主室に入らず快適であったため、新しい部屋として認識されたのではないかと考える。サヴォはヴェスティビュールを「単列配置 (corp de logis simple) には適合しな

いもので、二列配置 (corp de logis double) にのみ用いる」⁵⁷⁾と記述している。さらに、「単列配置はフランスに通例の配置」と断って建物の構成を説明している⁵⁸⁾ことから、ランブイエ邸が当時まだ珍しいイタリア風配置と認識されていたものと考ええる⁵⁹⁾。また、食堂⁶⁰⁾については、ジュリーのアパルトマンができてから、パヴィリオン部を挟んだ広間部分に食事のための専用室を作ったのではないかと推定する。この場合、裏階段から運ばれる食事の動線に無理がないが、侯爵やジュリーのアパルトマンに入るためには食堂を通らなければならない。なお、侯爵のアルトマンへの入口は、ジュリーのアパルトマンが設置されてからは中央パビリオン部に位置する前室側に移されたと考えるのが妥当だろう。

7 おわりに

ルヴォーの図面を手掛かりに平面図を復元した結果、これまで不正確であった敷地や建物の形状を明確化し、テラスとランプ部分の形状を補うことができた。その結果、門から前庭の軸線のずれを改称し、主翼と厨房棟との連絡通路をテラスの配置によって可能にしたことが分かる。おそらく、新たに前庭を囲む3つの建物とテラスを増築し、広間翼を古い館に直角に繋げて外観を整えたのであろう。そして、広間を大きくとるために、建物入口を側翼に配し、入口に導くためにペロンを工夫した。さらに、ヴェスティビュールを設け、主階段が月並みにならぬようにトップライトを設け、来客の視覚を上方に向けて2階の大広間へと導いた。

ランブイエ邸の記録に見られる当時の驚きは、こうした視線の工夫や動線の巧みさがもたらしており、賞賛は中世の建物を蘇らせた夫人の才覚に向けられた。夫人の計画は、敷地や建物の制約のある中、様々なところからヒントを得て考え出された工夫の集積である。そして、それらは後の貴族の館に見られる特徴でもある⁶¹⁾。サロンの流行とともに都市化が進むパリの館の構成変化へと繋がったと考える。

ランブイエ邸の特徴は、計画者が貴婦人であった故に可能となったと言えるのではないだろうか。なぜなら、特徴としてあげられる点は、いずれも生活者であり自邸に人を招く立場からの工夫だからである。ソーヴァルは「世紀の最も洗練された精神の作品」と賞賛した上で「建築家を楽しみ (agrément) と心地よさ (commodité) と完全美 (perfection) を教えた」⁶²⁾と記している。制約条件の中から生み出された建築的規範を逸脱した新しい構成の建物は、サロンの主人であり客人の視点を重視したランブイエ夫人の自由な発想によって可能になったと考える。

注

- 1) サロンはイタリア語'salone'が語源で、客を招いて時局や芸術を論じ優雅な遊びを楽しむこと、及びその部屋を指す。当時はまだその語がなく、ruelle (寝室のベッドと壁の間にできる空間) や réduit (奥まった場所) 等の言葉が使われていたようだが、ここでは上記の意味で用いる。
- 2) 夫人の従兄弟 Tallemant des Réaux の逸話集(1657-9)の記述に残るが、実際には建築家 Salomon de Brosse は行かなかったと指摘されている (Gustave Hirschfeld: Le Palais du Luxembourg, Laurens, p.19, 1931)。
- 3) ランブイエ邸のサロンの影響力を示すものとして、モリエール (Molière, 1622-1673) が戯曲 Les Précieuses ridicules (1659) で風刺している。
- 4) 10年代までは、宗教戦争によって破壊された建物修復工事が主であった (Roselys Coope: Salomon de Brosse, A. Zwemmer, p.56, 1972)。
- 5) Place Dauphine (1607), Place Royale (1603-05), Pont-Neuf (1606)

- などの他、壮大な都市計画 Place de France を開始した。
- 6) マンサール (François Mansart, 1598-1666) やルヴォー (Louis Le Vau, 1612-70) ら設計の邸宅が建てられた。
 - 7) Louis Batifol の講演集 (1928) によると、ある時期には赤と金色、さらに晩年は赤と緑にと、度々変更されていた (川田靖子: 17 世紀フランスのサロン, 大修館書店, pp.29-30. 1990)。
 - 8) 本論では、主に以下の図書を参考にした。Nicole Aronson: Madame de Rambouillet ou La magicienne de la Chambre bleue, Fayard, 1988. Emile Magne: Voiture et l'Hôtel de Rambouillet, Emile-Paul Frères, 1929
 - 9) Jean-Pierre Babelon: Demeure parisienne sous Henri IV et Louis XIII, du temps, Paris, 1960
 - 10) Emile Magne, op.cit., p.49
 - 11) 全4巻で、第2巻と第3巻にランブイエ邸に関する記述がある。第2巻は建物についての記述で、改築前の「ランブイエ邸」、改築後の「ランブイエ新邸」、さらに「ランブイエ邸庭園」の項がある。第3巻は所有する芸術品についての記述である。本論では復刻版を参考にした (Gregg, 1969)。
 - 12) 本論では、ブロンデルの注釈付きの再版本 (1685) の復刻版を資料とする (Minkoff, 1973)。
 - 13) タールマンの逸話集は、「宮廷は確かに気晴らしになるけれども、幾分わざとらしいところがある」と夫人の言葉を紹介し、「こういう考え方は彼女のような若い女性には珍しい」と感想を付している。
 - 14) 文学者によって作られたフランス語発展のための団体 Académie Française で、1635年に国立となる。
 - 15) サロン主賓は詩人マレルブ、詩人ヴォアチュール、ギュエ・ド・バルザック、悲劇作家コルネイユ、客人は枢機卿リシュリユー、シヨンベルク元帥、コンデ公妃シャルロット、その娘ブルボン嬢 (ロングヴィル公爵夫人)、セヴィニエ夫人、ラファイエット夫人などで、作家モリエールも訪れたという錚々たるメンバーである。
 - 16) 貴族の反乱であるフロンドの乱にサロンのメンバーが関わっていたため、サロンは閉鎖に追い込まれた。
 - 17) 主なものとして、長女ジュリーのアパートマンの設置 (1627)、ジルフェの間の増築 (1635)、食堂の設置 (1636) などがある。
 - 18) vol.2, pp.199-200, Gregg
 - 19) ランブイエ邸の工事の時期は、ロングヴィル邸 (Hôtel de Longueville) だった。
 - 20) ルイ9世によって1260年頃に設立された盲人300人を収容する施設。
 - 21) 特別に税金と収益を支払う義務があった。
 - 22) ルイ14世に進呈された豪華な絵地図で、1649年頃のバリの様子を著す。Jacques Gomboust: Plan monumental du Paris au XVIIe siècle, 1651
 - 23) 当初はルイ13世の宰相リシュリユーの館 (Palais Cardinal) で、彼の死後、主君に寄贈され、1643年にルイ14世が移り住んだ。ランブイエ夫妻も、自邸の工事中に一時居住していた。
 - 24) 界限の賑わいぶりは、当時の図版から確認できる (Allan Braham & Peter Smith: François Mansart (plates), Zwemmer, pl.157, 1973)。
 - 25) 「同じ通りの別の建物も所有したが、連結しなかった」とあり、建物は断りがないので、北は平民の住宅 (maison) だったと考えられる。 (Gregg, op.cit., vol.2 p.199)
 - 26) Nicole Aronson, op.cit., pp.80-81
 - 27) ソーヴァルの書以外に、次の記述を参考にした。Jean-Pierre Babelon, op.cit., pp.184-200. Nicole Aronson, op.cit., pp.80-81
 - 28) Jean-Pierre Babelon, op.cit., p.186
 - 29) Nicole Aronson, op.cit., p.78
 - 30) Matthäus Merian: Plan de PARIS sous Louis XIII, 1615
 - 31) Jouvin de Rochefort: GRAND PLAN DE PARIS ET DE SES ENVIRONS, 1665
 - 32) Bullet Blondel Jaillot le Fils: PLAN DE PARIS, 1710
 - 33) Gregg, op.cit., vol.2, p.199
 - 34) 初めは Hotel d'O と呼ばれ、それから Hotel de Noir-moustier, その後 Hotel de Pisani となった。
 - 35) バリの市民のうち200人だけが許可されていた。
 - 36) フォンテヌブロー宮殿で働いた建築家であり技術者。娘は、後にサロンメンバーとなる文筆家ラファイエット夫人 (Madame de La Fayette, 1634-93) である。
 - 37) 「その建物を彼女がデザインし、彼女一人で企画し指導し完成させたことを知る」 (Gregg, vol.2 p.200)

- 38) 「ミケランジェロ (ランブイエ夫人の喻え) は案を撤回せず建築家の計画全てに不満で、建築を作り直そうとした」 (L'industrie et l'art decoratif aux deux derniers siècle, firmin-didot et c, p.40, 1887)。
- 39) 「図面の引き方を知っていたので、すぐに製図を終えた」 (Aronson, op.cit., p.78)
- 40) 詳細は拙稿を参照のこと (ルイ・サヴォの建築書にみられる17世紀フランスの邸館建築について、日本建築学会計画系論文報告集、第548号, pp.271-276, 2001.10)。
- 41) 「入口からそして前庭のあらゆる場所から庭園が見えた」 (Gregg, vol.2 p.201)
- 42) Jean-Pierre Babelon, op.cit., pp.184-200
- 43) 「前庭から裏庭の左へと抜ける」 (Gregg, vol.2 p.201)
- 44) 「実のところ回廊なのかペロンなのか…」 (Nicole Aronson, op.cit., p.77)
- 45) Nicole Aronson, op.cit., p.81
- 46) 詩人シャプラン (Jean Chapelain, 1595-1674) の発案で、アマデイス・デ・ガウラの女王ジルフェの頌歌を描いた巻物が壁に貼られた。
- 47) 大型32、小型49のクリスタルの花瓶があった (Nicole Aronson, op.cit., p.86)。文筆家スキュデリー譲は、庭や温室の花の香りでうっとりとする雰囲気が漂っていたことをランブイエ邸の特徴の一つにあげ、また、彼女の兄 (Georges de Scudéry) の詩から当時フランスにはなかったいくつかの花が咲いていたことが確認できる (Nicole Aronson, op.cit., p.74)。
- 48) Gregg, op.cit., vol.2, p.201
- 49) Gregg, op.cit., vol.2, p.201
- 50) Gregg, op.cit., vol.2, pp.287-288
- 51) 庭園のための水源を得るために必死に試みたことが手紙の存在で知られている (Nicole Aronson, op.cit., p.83) が、結局、水源はリシュリユー邸に行き、実際には「ちょろちょろ流れる細流」でしかなかったことが、タールマンの逸話集に記録されている。
- 52) 拙稿参照 (17世紀フランスの住居の構成とその変遷、ルイ14世様式の成立の背景 その1、日本インテリア学会論文報告集4号, pp.41-48, 1994.3)
- 53) この館でアングレーム夫人が養育した姪は、ランブイエ夫人の親友 (Nicole Aronson, op.cit., p.78) なので、特徴を理解していたと思われる。
- 54) Gregg, op.cit., vol.2, p.201
- 55) ソーヴァルの書にも、Palais Cardinal, Petite-Luxembourg, Place-Royal, Ile Notre-Dame の窓がランブイエ邸の『青の部屋』の影響を受けたという記述がある (Gregg, op.cit., vol.2, p.201)
- 56) Minkoff, op.cit., pp.130-139
- 57) Minkoff, op.cit., pp.33-34
- 58) Minkoff, op.cit., pp.45-48
- 59) 主翼の部屋は、一列に連なる corp de logis simple と二列に配置される corp de logis deuble があるが、二列配置は17世紀中期の館 (François Mansart: Hôtel de Jars, 1648) から見られ、その後広まる配置である。拙稿参照 (17世紀フランスの住居の構成とその変遷、ルイ14世様式の成立の背景 その1、日本インテリア学会論文報告集4号, pp.41-48, 1994.3)
- 60) 食堂の存在が図面で確認できるのは18世紀に入ってからである。
- 61) ヴェスティビュール、主階段の位置、フレンチウィンドウ、二列配置、庭園を囲う配置、食堂、浴室などである (拙稿: 17世紀フランスの住居のインテリアとその変遷、ルイ14世様式の成立の背景 その2、日本インテリア学会論文報告集5号, pp.75-82, 1995.3)
- 62) Gregg, op.cit., vol.2, p.200

図版出典

- 1 Hilary Ballon: Louis Le Vau -Mazarin's Collège, Colbert's Revenge-, Princeton, 1999, Fig.17 (Recueil du Louvre If21, Paris)
- 2 Hilary Ballon, op.cit., Fig.80 (Archives Nationales, F21 3567/9, Paris)
- 3 Jean-Pierre Babelon: Demeure parisienne sous Henri IV et Louis XIII, du temps, 1960, p.185
- 4 Emile Magne: Voiture et l'Hôtel de Rambouillet, les origins, Emile-Paul Frères, 1929, p.49
- 5 Jean-Pierre Babelon, op.cit., p.146 (Petite Marot)
- 6 Plan de Paris 1530-1808 (地図史料編集会編、柏書房、1994年3月復刻)
- 7 Hilary Ballon, op.cit., Fig.17
- 8 Hilary Ballon, op.cit., Fig.80

(2009年5月8日原稿受理、2009年12月24日採用決定)